

(2) 皆に安心してもらえるように

農家が牛に与えていたエサの稲わらが汚染されていたことによる牛肉騒動は、野菜の出荷停止による被害どころか極めて広範囲に及んだの問題となっています。稲わらは福島県内ばかりか、宮城県の稲わらも使われていたと報道されており、基準値超えのわらは東北ばかりか関東の畜産農家でエサとして使用されていたとなれば、何処の産地の牛肉から汚染された牛肉が出荷されても不思議ではなくなってしまいます。小売り各社は独自の全頭検査を始めたり、安全を確認できる個体のものに切り換えるなどの動きをするなど、トレーサビリティ・システムを使って流通しているものは安全と強調してもいます。そして実際に基準を超えた牛肉が出回り、検査体制の不備なままの現状を主婦連の佐藤事務局長は、「今回牛肉の買い控えが起きても風評被害と呼ばないで欲しい」と朝日新聞に語ってもしました。

確かに厚労省も学者先生方も毎日食べ続けなければ過剰に心配する必要もなく、汚染された牛もきれいなエサを与え続ければ、数ヶ月間で放射性物質は排泄されて汚染はほぼ無くなると言っていますが皆が「はい、そうですか」と信じてくれるのでしょうか。今までも政府を始めとする情報隠蔽の姿勢は明らかと感じていますし、検査結果の公表数字は大雑把なものが多く、信頼するより参考程度としか受けとめていないのではないのでしょうか。消費者が知りたいのは、どの県どの品目から放射性物質が検出されたかではなく、スーパーの店頭で今買いたいと思っている品物に放射線量が付いているかどうか、又その度合いは如何だと思えます。

食の安全に関しては昭和30年代の森永ヒ素ミルク事件以後、大きく社会問題として取り上げられていますが、特別に強調されるのは、なぜでしょうか。安全性に神経質にならざるをえないのは第一にその全てが直接食べる消費形態であり、それが次世代にまで影響する怖れがある危険性を言われるからでしょう。又、日常の生活に溶け込んだ品物ばかりであり、危険についても未知の要因が多すぎることも影響していると思います。同時に科学的に安全だと政府などが公表しても、感情論や風評などが無関係に人の心に入り込んでくることもあります。安全であるといわれても、それで安心するか否かは主観の違い、個人差であり、絶対ではないと思います。それだけに人々を不安にさせない為の努力を常に積み重ねる必要は大と言わざるをえません。安全性を科学的に最善を尽くして推し進めることだと思えます。

(鈴木重雄 筆)